

Title	ロシア語動詞アスペクトの諸問題 : 研究ノート
Author(s)	石田, 修一
Citation	大阪外国語大学学報. 45 p.19-p.31
Issue Date	1979-02-19
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80750">https://hdl.handle.net/11094/80750</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# ロシア語動詞アスペクトの諸問題

(研究ノート)

石 田 修 一

## The theoretical problems of the grammatical category “aspect” in the Russian Verb

S. ISHIDA

So far as the grammatical category “aspect” in the Russian Verb” is concerned, there are many unsolved questions. First of all, there are two different positions as to the grammatical meaning of aspect:

1. One holds that the opposition between the categories of perfective and imperfective aspect is a privative opposition: perfective aspect is the marked member of the opposition, and imperfective — the unmarked member; that is, the former presents the action as an indivisible whole, and the latter, without reference to the totality of the action.
2. The other holds that the relationship between the aspects should be recognized as an equipolent opposition; thus a perfective verb expresses an internal limit set to the action, while an imperfective verb expresses direction toward the internal limit.

The first theory corresponds to the viewpoint in which the aspectual pairs are formed only by so-called imperfectivation, that is, the tendency to attach great importance to the morphological side in defining the aspectual pairs. Thus the members of this opposition are individual words.

The second theory corresponds to the viewpoint in which the aspectual pairs are formed by every possible morphological means: not only by imperfectivation, but also perfectivation and suppletion, so that the members of pairs are the forms of the same word. In other words this opinion has a tendency to put stress on the semantical side of the verb.

Thus, the definition of the category of aspect even today remains varied and controversial.

[ 1 ] 文法範疇 (Grammatical Category) が「ある特定言語の言語的事象を記述する場合に用いる、<sup>①</sup>同じ意味を表わす形態の集団」というほどの意味において、アスペクト (Aspect, Вид) がロシア語

動詞を含めて、スラヴ語動詞における最も重要な文法範疇である、ということについては、ほぼ決着済み、と思われる。ところで、言語的抽象においては、語彙的抽象と文法的抽象を区別しなければならない。語彙的抽象においては、より高次の抽象が低次の抽象を包含し、文法的抽象においては、より低次の抽象の上により高次の抽象が成層して行く。<sup>②</sup> 文法的抽象は語彙的資料の単純な普遍化＝抽象とは異なるものではあろうが、ともかく両者の中には共にその抽象度の差異に応じてヒエラルキーが存在している。スラヴ語は、他の諸言語とは異り、語彙的手段によってではなく文法的抽象を語中に言わば象嵌することによって、サピアの、いわば「全体思惟を構成する概念的資料を多小にかかわらず、その言語の精神が許容する限度まで、みずからに取り入れ」ることによって、<sup>③</sup> したがって文法範疇としてアスペクトを示すのであるが、以上の観点からすれば、アスペクトは、同じ動詞組織における時制 (Tense)、法 (Mode) と比較した時、その抽象度にはよほどの差異がある、と見るべきであろう。なぜならば、アスペクトは、勿論、思惟の長期にわたる抽象活動の産物ではあっても、動詞語義との関係が極めて深く、かつ顕著だからである。それ故、これは語彙・文法的範疇 (Lexical-grammatical category) と称される場合もある。また、極端な場合には、文法範疇として認知せず、スラヴ語動詞の系譜を辿った結果として、純粋に語彙的な範疇 (Lexical category) である、と結論づける研究者が存在している。<sup>④</sup> しかしながら、すべての現代スラヴ語動詞は、例え、単体動詞 (所謂, imperfectiva tantum, perfectiva tantum) であっても、アスペクトを免れて存在し得ず、動詞全体に例外なく貫徹される共通の一般的意味を有し、更に形式的にも、所謂、対立 (Видовая оппозиция) を形成する場合には、概して一定のパラダイムを組織し得る、という事実があってみれば、これを印欧語等からの演繹によって、純然たる語彙的範疇とするには無理があろう。したがって、今日、ロシア語動詞のそれを含めてスラヴ語動詞のアスペクトを文法範疇として指定することには問題はない、と考える。

文法範疇としてのアスペクトは完了体と不完了体の対立に依拠して成立しているのである。imperfectiva tantum, perfectiva tantum の存在が、文法範疇としての基盤をくずす訳ではない。アヴィーロヴァ (Н. С. Авилова) も指摘しているように、「すべての動詞がそれ (対立) を有する訳ではない、という点にこそ、まさに、体 (Вид) の特徴がある」のである。<sup>⑤</sup>

〔2-0〕さて、現代のアスペクト研究 (Аспектология) 一般における問題点—スラヴ諸語以外において、あえてアスペクトと称される場合の問題点を含めて—は、マースロフの研究 «Вопросы глагольного вида в современном зарубежном языкознании»<sup>⑥</sup> において概括されているが、スラヴ語動詞においても同じく、概ね次の三点が問題となろう。第一には、アスペクト (Aspect, Вид) とアクツイオンザルト (Aktionsart, способ действия)<sup>⑦</sup> の区別の問題、第二には、体派性 (видообразование) は、動詞派生 (глагольное словообразование) 一般か動詞的パラダイム (глагольная парадигматика) なのか、という問題、第三に、文法範疇としてのアスペクトの意味、すなわち理念の問題である。

これらは、当然、相互にいわば連鎖的な環を形成する問題群であるため、アスペクト研究史においては、更にこれに時制の問題が絡んで、問題点が未分化のまま、研究が開始された。<sup>⑧</sup>すなわち、今日アクツィオンザルトと見なされるものまで含めて、あらゆる動詞派生をすべて、アスペクトと見なし、それによってアスペクトの意味を考察しようとしていた。したがって、それは単に完了体(совершенный вид)と不完了体(несовершенный вид)というペアの対立、としてではなく、事実、それ以外の多数の виды が分類された。<sup>⑨</sup>換言すれば、文法範疇としてのアスペクトでなく語彙・意味範疇に関わる分類が絡んでいたのである。語彙と文法の峻別は、体派生の形態的手段をどの範囲までに限定するか、という問題でもあり、それは更に、体のペア同士は同一語の形(同一 lexeme の形)なのか、それとも別々の二語なのか、という問題としても発展する。

今日、第一の点については、アスペクト研究者たちの間で、既に共通認識となり、確認済み、と言えようが、第二、第三の問題点については、今なお、論争が熾り続けている。特に第三の点については理論的にも実践的にも極めて困難な問題を孕んでいるといえよう。

〔2-1〕 本稿では、特にこの第三の点について、過去の学説を比較検討し乍ら、あらためて、ロシア語動詞の文法範疇としてのアスペクト(вид)一わが国におけるロシア語文法は伝統的に вид を「相」とせず「体」としてきているので、以下においても、「体」を用いる一の意味について考察したいと思う。

しかし、そのためには、必然的に第二の問題が関わって来る。なぜならば、学校文法などにおいて、体派生の形態的手段とされて来ている Imperfectivation (имперфективация), Perfectivation (перфективация), Suppletion (супплетивизм) によって例外なく体のペア、すなわち видовая оппозиция が形成され得るか、否か、にどのように答えるかは、体の意味の決定に少しく影響を与えと思われるからである。

ところで、体派生(видообразование)を、語派生(словообразование, word-formation)とするか、語形変化(словоизменение, inflexion)とするか、換言すれば、体のペア同士を別々の独立した語と見なすか、それとも同一語の形と見るか、という問題についての学説は三分類できよう。ドルノヴォ(Дурново), ポリヴァーノフ(Поливанов), メイエ(Meillet), カルツェフスキー(Karcevski), クズネツォフ(Кузнецов)等の第一グループ, シチエルバ(Щерба), ヴィノグラードフ(Виноградов), ムチニク(Мучник), チーホノフ(Тихонов)等の第二グループ, そして、マースロフ(Маслов), ボンダールコ(Бондарко), ブラーニン(Буланин), ブイコヴァ(Быкова), ゼームスカヤ(Земская), ラスードヴァ(Рассудова)等の第三グループ, である。

第一グループのカルツェフスキーは、体派生は «внутренняя синтагматика» であるとし、メイエも亦、「体において二つの相関する動詞は独立動詞である」<sup>⑩</sup>としており、「動詞派生全体の……個人的な場合にすぎない」<sup>⑪</sup>としている。第二グループのヴィノグラードフの場合、「完了体、不完了体の相関するペアの形は、語彙的意味における差異のない限り、同一動詞の形である」<sup>⑫</sup>としている。

これはロシア言語学における語義の重視が強くなった時期の一般的傾向であり、シチェルバの場合はもっと極端であった。この学説は、長い間、学校文法において採用されて来たものである。第三グループを代表するのはマースロフである。彼の場合、同一語の形と見なせるペアは **имперфективация** による場合だけであって、**перфективация** によるもの、とは区別しなければならない、としている。<sup>15</sup> 所謂 **пустая приставка (prèverbe vide)** は、完全に脱意味的 (**десемантизирующийся**) で、文法化した (**грамматикали-зованный**) **prefix** ではない、のである。この見解は、今日の体研究においては支配的である、ラスードヴァもこの見解をとっており、わが国でもすでに紹介されている。<sup>16</sup>

しかし、最近、アヴィーロヴァは、マースロフのあげた (i) **имперфективация** のペアにおける語彙・意味的同一性、(ii) **вторая имперфективация** の一貫性・規則性という説に対して、動詞の意味論的な研究を基にして反論を行っている。それによれば、(i)については、外見上ペアに見えても、その動詞の意味構造を吟味すれば、動詞の意味全体での対応でなく個別的意味での対応であって、**имперфективация** は意味的同一性をもつ、という説明の仕方には納得できない、としている。また、(ii)についても、どうして異なるパラダイムを有する筈のペアを同一動詞とするのか、と疑問を提示し、更に **вторая имперфективация** の規則性は、時制、人称等の形とは異り、制約された規則性であり、結果的に規則的なものであって、それはもはや一貫性とか規則性とか呼べるものではない、したがって、以上から、語形変化でなく語派生であり、ペアはそれぞれ独立した語であり、独立した **lexeme (лексема)** だと主張している。こうして、この論争はいまだに続いており、完全な学説の統一は見られていない。<sup>16</sup>

しかし、今、アヴィーロヴァの見解を棚上げして、今日、多くの研究者の認めるところとなつて来ているマースロフ等の見解を正しい、としよう。この場合、ロシア語動詞の体のペアは **имперфективация** による方法によつてのみ形成される訳であり、それ以外の方法による場合は、単に相関する意味的ペアを組むにすぎないか、非相関的動詞、に終る訳である。しかるに一方では、体の意味は非相関的動詞を含めてロシア語動詞全体に及ぶ、とされている（これは一般に認知されているし、マースロフ等も勿論認めている訳である）から、そこで、「体の対立は二重の仕方で見れる。一つは、完了体動詞全般の対立として、いま一つは、同一の語義をもった完了体動詞、不完了体動詞の体立という仕方」<sup>17</sup> で、対立する、と言わなければならない。同じような説明の仕方はボンダルコも採用している。アヴィーロヴァの場合は、同一語義で完了体；不完了体の対立を成す動詞が存在するという、その、文法範疇の中の、主要特徴 **«основной признак грамматической категории»** にこそ、体の文法的意義は、立脚しているのであり、ボンダルコ等の見解に同意できない、としている。<sup>18</sup>

体は語彙的範疇でなくて、純粋な文法範疇である、とする限り、そこには一定の意味的普遍性、共通性が存在し、且つそれに伴う、少なくとも基本的に優勢な形態的手段が存在しなければならない、と考えるが、体の対立、体のペアを形成するものを **имперфективация** という形態的手段によるもののみ、とした場合、その形態的手段を有しない場合のものにまで体の意味が存する、と説

明するためには、全般的に、あるいは«вобщем, системном плане»において対立する、と説明せざるを得ない。しかも、かつてムチニクが行った統計に従えば、所謂、体のペアを形成しない動詞は、全動詞の31%を構成する、という<sup>⑪</sup>。ムチニクの場合は、ヴィノグラードフと同じく、имперфективация, перфективация, супплетивизм もすべて体の対立を形成する、という前提条件の下においてである。すなわち、ムチニクの言う31%は、マースロフの言う«абсолютная дефективность»<sup>⑫</sup>をほぼ指す、とすれば、体の対立を имперфективация の場合のみに限れば、マースロフの言う«относительная дефективность»<sup>⑬</sup>も更に加わり、統計的には、体のペアを形成しない動詞は一層増加する、と考えられる。

文法範疇としての体は基本的には、対立に依拠して成立しているのであり、そこにこそ文法的意義としての体の意義がある。したがって個別的対立を狭い範囲に抑えれば、「全般的対立」によって体のカテゴリーが成立する、と説明する必要が生じる。アヴィーロヴァの場合、「全般的対立」とは言わず、「主要特徴」<sup>⑭</sup>に立脚する、と説明している、のである。但し、アヴィーロヴァの場合は、意味構造の分類によって、上にあげた三つの形態的手段すべてが体の対立を形成するのである。唯、ヴィノグラードフの様に、その対立するペアを同一語とせず、別の独立語；派生一般；とするのであるが。

本稿においては、видовая оппозиция を、以上の学説のどれによって捉えるべきか、という結論を引き出すことは控えておきたい。唯、これに対する結論と、体の文法的意義の決定は相互に密接に関わるものではないのか、と述べておきたい。形態の範囲を狭めて行った場合の体の一般的文法的意義の決定と、чистовидовые приставки まで含む対立から一般的文法的意義を決定すること、の間には、差異はないのか、という問題である。形態的対立の裏付けがなくとも、全般的、組織的に対立しているのであって、対立を示さない動詞も体の意を有するのだから、体の意義の決定には以上の問題は直接の関わりはない、と考えてよいのだろうか。

〔3-0〕 次に文法範疇としての体の意味について纏めておく。ロシア語動詞の体を不完了体と完了体の対立として捉える事自体、歴史的には、時間を要したが、体の文法的意味の確定においても、今日なお論争は続いている。したがって、最初に、体の意味についての研究史から、いくつかの論争点をヴィノグラードフの«Русский язык»<sup>⑮</sup>等にしながら整理してみる。

十九世紀オーストリアのスラヴ学者ミクローシチ(Miklosich, Miklosic)の代表的著作「スラヴ諸語比較文法」(«Vergleichende Grammatik der slavischen Sprachen» IV. Syntax)の記述によれば、「行為は、継続中のものとして(«als dauernd dargestellt»)か、完了したもののとして(«als vollendet ausgesagt»)<sup>⑯</sup>、示される。前者は不完了体動詞によって、後者は完了体動詞によって表わされる」のであるが、この定義は、すでにラズムーセン(Д. П. Размусен)、ヴィノグラードフ等によって批判され尽している。その要点は、第一に«als vollendet」という定義が、«Он вчера покупал железо»では許容できるとしても、«Он завтра купит железо»では«Noch nicht vollendet»を表わす、とい

う事 (ラズムーセン)<sup>24</sup>、第二に、この定義は、*ingressive* (побежать など) や *inchoative* (заговорить 等) を含む始発の意の動詞には適用不可能である (ヴィノグラードフ)<sup>25</sup> ということに尽きよう。

次に、行為に段階を設定し、完了体は行為の開始と終了の段階を表わし (《начало и конец действия》), 不完了体は行為の中間段階 (《середина》) を表わす, という定義がある (ヴァストーコフ, А. Х. Востоков 等)。ヴィノグラードフは、これに対して、поиграть, посидеть などの動詞についてのこの定義の不適合性を指摘したのち、ペシコフスキー (А. М. Пешковский) を引用しながら、この定義にいう意味は、接頭辞によってもたらされるものであり、それは純粋な体の意ではなく、この点では、ミクロシチなどのいう完了性の意味と同様の誤りだ、としている。

もう一つの理論は、完了体は延長度をもたない (непротяженное), 点的な «точечное» 行為を表わし、不完了体は持続中の (длящееся), 線的な «линейное» 行為を表わす, とするものである。この定義は、ブルグマン (Brugmann), デルブリック (Delbrück), メイエ (Meillet) 等によって、唱えられ、ソシュール (Saussure) も、これを採用している。また、マゾン (Mazon) も、これに続いている。ロシアにおいては、ペシコフスキーが、採用している。ペシコフスキーは、所謂 «фазовые глаголы» が、完了体動詞と結合し得ない, という事実から出発して、「完了体動詞の意義は、動詞語根の表わす過程の非延長性、非持続性に帰する。……点は非延長的存在である」としている。つまり、«фазовые глаголы» は、ある行為の局面 «фаза» を表わす動詞、いわば延長性をもつ行為を切断して行く、区分して行く意味をもっている動詞と言えようが、初めから延長性をもたない、点的な意味をもつ動詞は区分、切断のしようがなく、その非延長性、非持続性を表わすものこそ完了体だ。従って、完了体とは点的であり、不完了体は線的である、とされる。線は切れるが、点は切れない、しかし、この説明は、限界性 (предельность) の概念、つまり時間的制限の意をもつ動詞 нагуляться 等、проспать 等の動詞には不適合である、とヴィノグラードフは指摘している<sup>26</sup>。ムチニクも、この理論を評して、真理の一端は示しているが、それは不十分であり、そこには完了体動詞の積極的特徴である結果性 (результативность) の意が欠如している、としている。ムチニク自身は完了体=結果性、不完了体=持続性の主張を為しており、どちらも積極的特徴を表わす、としている。

フオルトウナートフ (Фортунатов) の理論も亦、一定の影響をもっており、ヴィノグラードフは、真理に一番近い理論 (今までの中では), としている。それによれば、完了体は、展開中の現象を時間的制限 (非持続的か持続的かの) との関係で捉え、不完了体は、そういう時間的制限とは無関係に現象を表出する。<sup>27</sup>

これに対して、ヴィノグラードフ自身は、完了体の概念における基本的特徴は、行為の限界 «предел действия», 目的の達成 «достижения цели», 行為の持続性についての觀念の制限ないしは排除 «ограничение или устранение представления о длительности действия» である、としている。<sup>28</sup> この理論は、のちに述べる、ヤーコブソン (Jakobson) やトルベツコイ (Trubeckoy) に系譜をもつ二項理論を向うにして、今日なお効力を失っていない、と考えられるが、早くは、ラズムーセンにその源流を見ることができる。ラズムーセンによれば、<sup>29</sup> 完了体動詞はまず、行為を目的 (限界)

を達成したものとして《как достигающее своей цели (своего предела)》、次いで、一つの全体として《как одно целое (начало, середина, и конец – совокупно)》表わす。また、不完了体は、行為をまず目的達成の準備として《как приготовление к достижению цели》、次いで全体性を表わさずに、その物質的な（意味的な）特徴からのみ観察する行為（《действие, рассматриваемое только со стороны вещественных (знаменательных) своих признаков, без обозначения целостности действия》）を表わす。この целостность について言えば、古くチェコのチェルヌイ (Cerny) も同じく、完了体は《собираательно, сомкнуто, в совокупности, суммарно, в сжатом виде》に行為を表出する、としている。

最後に、もう一つの理論は、カルツエフスキーの結果性 (результативность) の理論である。ソヴィエトの学者の中でも、これをムチニクなどが、不完了体の持続性との対置で、それぞれを積極的特徴として示している。<sup>②</sup>しかし、これは、ヴィノグラードフも書いている様に、限界性の個別の場合、と考えられよう。

〔3-1〕さて、文法範疇としての体の意味についての定義を、ムチニクの記述を補足しつつ、総括すると次の様な指標が使われたことになる： 1) законченность действия, 2) длительность действия (以上, ミクロシチ), 2) начало, конец, 3) середина (ヴァストーコフ等), 4) непротяженность (или недлительность) действия, 5) точечность, 6) линейность (以上, ベシコフスキー, ブルグマン, メイエ等), 7) предельность (ヴィノグラードフ, ラズムーセン等), 8) определенность действия по отношению к существованию во времени (フォルトウナートフ等), 9) целостность (ラズムーセン, チェルヌイ, のちイサチェンコ, マースロフ等), 10) результативность (カルツエフスキー)。

こうした体の定義における差異というのは、主として、ある典型的な、機能的な特徴のいずれかに比重をかける事によって生起して来る、と思われるが、そうした個別的機能を一般化し、普遍化したものこそ、まさに文法範疇としての体の意味なのである。

そうした点で現代の体の理論の中では大別すれば、二つの流れがある、と思われるが、その一つは、この限界性の理論（仮にそう呼ぶとすれば）である。

ヴィノグラードフの《Русский язык. Грамматическое учение о слове》が新しく出版されて以後—それ以前にも1938年にこの著作の原形は《Современный русский язык》として出ているが—ロシア語文法教科書は、多くの場合、このヴィノグラードフの限界性の理論を採用している。<sup>③</sup>これらの定義に共通していることは、内的限界《внутренний предел》、内的抽象的限界《внутренний абстрактный предел》、内的質的限界《внутренний качественный предел》を完了体の定義に用いていることである。1970年の、今のところ一番新しいアカデミー文法（シヴェードウ編）では、この、内的抽象的限界を説明して、「そこへ到達した後は、直ちに行為が自らを究め尽し《исчерпать себя》、停止され《прекратиться》ねばならない、そのような分界点、ないしは臨界点《критическая точка》である」としている。<sup>④</sup>この理論は現代ソヴィエトの主として文法教科書類などにおいて根強いが、モスク



ワ大学1964年出版の《Современный русский язык》(часть II)だけは、限界性の理論をとりつつ、  
《бинарное противопоставление》(二項対立)という用語を使っている。

もう一つの大きな派れは、完了体は全一性《целостность》を表わし、不完了体は、その様な積極的  
特徴をもたない、とする所謂、「欠性対立」(privative opposition, «привативная оппозиция»)の理論であ  
る。全一性、という定義は、すでに述べた様に、ラズムーセン、更には、チェルヌイ、ルジチカ  
(R. Ruzcika)、イサチェンコ、マースロフなどによって説かれている。ラズムーセンの定義は、一  
チェルヌイのそれは、と言い直す方が適当かも知れないが——一つは限界性理論に発展し、もう一  
つは、全一性理論(仮にそう呼ぶとして)に発展した、ということができよう。この潮流は、主  
として、ロシア、ソヴィエト以外における研究者たちによって、古くは、ソシュールなどにも溯  
源をもちつつ、しかも一般方法論的には、優れたスラヴィストたちを輩出したブラーグ言語学派構  
造主義言語学者たちの中から、すなわちトルベツコイ(N. S. Trubetzkoy)と、それに続く、ヤーコ  
ブソン(R. Jakobson)が、音韻論レベルの理論——二項論(binarism)——を、アスペクトの理論に応用  
したものである(「ロシア語動詞構造論」(«Zur struktur des russischen Verbums»))。こうして、全  
一性の意味と二項対立の理論との合体した理論は、チェコのドスタル(A. Dostal)また今日の  
ソヴィエトにおいても次第に影響力をもち始めており、その最も代表的な、有力な研究者  
は、ブルガリア語の研究業績で知られるマースロフ(Ю. С. Маслов)、であり、さらにボンダルコ(A.  
В. Бондарко)、スロヴァキア語のアスペクト研究のスミルノフ(Д. Н. Смирнов)<sup>⑤</sup>、更に、1968年に、外  
国人のロシア語教師用に上梓された「ロシア語動詞の体の用法」の著者ラースドヴァ(О. П. Рассудова)<sup>⑥</sup>、  
などの人々が知られている。しかし、どちらかと言うと、この理論は、今のところ、理論書にお  
いて、見られる事が多い様に思われる。東欧以外においては、イギリスのJ. Forsythも亦、ヤー  
コブソンの理論を紹介したのち、《a privative opposition》として記述し、《a perfective verbs  
expresses the action as a total event summed up with reference to a single juncture》と定義してい  
る。<sup>⑦</sup>

〔3-2〕 この二大潮流の中で後者の理論的影響が、益々強くなって来ているとは言え、決して、  
この論争はまだ決着を見ていない。

ところで、ボンダルコはブルガリア語研究の業績で有名なマースロフとは違って、この全一性  
理論、欠性対立を、現代ロシア語において理論的に実証しようとして興味ある試みをしている。

彼は、体の機能的可能性・潜在能力の総体とし《как совокупность их функциональных возмож-  
ностей, как их семантический потенциал》、体の意味を定義しよう、としている。つまり数個の現  
象を表にして、その中から、本質を把握しよう、とする試みである。<sup>⑧</sup>

まず、1)特徴が必ず表われる場合を+; 2)特徴が表われる場合とその逆、両方の存する場合を干  
; 3)特徴の表出が特別の条件、つまり統語論的、語彙論的条件によって制約される場合を(干);  
4)特徴の表出されない可能性の制約される場合を(干); 5)特徴の表出のない場合を一、と決めた上

で、例えば、完了体が **долго, два часа** 等 **длительность** の特徴を含む状況語とは結合し得ない、という事でーであるが、時間制限の **Aktionsart** の意をもつ動詞とは結合し得ることもある (**долго проболев, пролежал** 等) ので(+), つまり完了体は **длительность** の特徴に対しては(+)である、と記す。不完了体の方は容易にこれらの意味特徴をもつ状況語と結合する (**Долго писал** 等) が、その特徴を表わす、とは限らず、それを表出しない場合もある (**Завтра начинаются экзамены. Я часто заходил к нему** 等) ので、不完了体に対しては、**длительность** 干、と記す。この様にして作成した表が、下の通りである。

意味 体 特徴	Ц.	Проц.	Л.	Д.	Наст.	Посл.	Одн.
完了体	+	-	(-) +	- (+)	(-) +	(-) +	- (+)
不完了体	- (+)	- +	- +	- +	- (+)	- (+)	(-) +

Ц. = Целостность ; проц. = Процессность ; Л. = Локализованность действия во времени

(однажды, как-то раз 等と結合し得る能力。完了体は容易にこれらと結び得るが、ある条件下では **нелокализованность** を表わす **часто, всегда** 等とも結び得る)。

Наст. = выражение внезапного наступления факта (на фоне предшествующей длительности или отсутствия всякого действия). (вдруг, внезапно などと結ぶ能力)。Посл. = Последовательность,

Одн. = Одновременность.

この表によれば、相対的には不完了体の特徴無標項的(немаркированный, unmarked)性格、完了体の有標項的(маркированный, marked)な性格が判る様にもとれる。しかし、これはもっと、広範囲の現象を捉えてみる必要がありはしないだろうか。ラズドヴァの場合をもっと体系化して同じ様に整理するのも一つの方法だと考えられる。

しかし、ボンダルコは、多数の機能上での主要特質 **«Доминант»** を取り上げれば、それは完了体では **целостность**、不完了体では **процессность** であり、**целостность** は、ある意味では **процессность** の対立物でもあるし、この特徴のもう一つの面は、まさに内的限界の概念であり、**процессность** は、まさにそのような限界による制約をもたない、ということで、決して相互に矛盾・排除し合うものではない、とも述べている。<sup>⑩</sup> 全一性と限界性は、歴史的にも、ラズムーセンの定義に見る様に、同一平面で捉えられているのではないか、という訳である。そして、不完了体は無標示項で、弱い事項だけれども、その表現力の点では完了体に劣らない多数の積極的な意味をもつのだ、と結んでいるのである。ボンダルコの場合、欠性対立論はそのままに、全一性理論と限界性理論の和解を試みているのである。

これに対して、アヴィーロヴァは、最近、内的限界性の理論を擁護して、二つの論拠をあげている。<sup>⑫</sup>第一に、ヴィノグラードフのマゾン批判<sup>⑬</sup>を引用し乍ら、個別的現象の漸次的、逐次的、段階的進展の方法によって限界に達する合成的、組み合わせ的行為を表わす **поподать, повытаскивать, понастроить** 等の場合は、全一性で捉えられない、という事、第二に、体のカテゴリーは極めて語彙・意味との関係が深いカテゴリーであり、意味こそが対のペアの形成の可能性を支配しており、意味的には限界動詞 **«предельные глаголы»** だけが体のペアを形成し得るのであって、その動詞が、まさに完了体では、抽象的・質的・文法的限界を表わすのだ、としている。

動詞の語義が体の意味の出現に影響を及ぼす因子の一つである事は、多数の研究者たちによって指摘されているが、アヴィーロヴァの場合、文脈とは一応離れて、動詞の語義を綿密に追及している。その意味分類は主として、チェコの学者ダネシ (**Fr. Daneš**) の分類を基礎にしてなされている。<sup>⑭</sup>この分類の検討については稿を改めて、いずれ考察したい、と考えているが、本稿においては、割愛しておきたい。

そうした語義に対する考察からアヴィーロヴァが引き出している結論の内、1)完了体は内的抽象的限界の意をもち、不完了体はその限界達成への志向性を表わす、という点で、2)二つの体の対立は、決して欠性対立でなく、**«эквивалентная оппозиция» (a equipollent opposition)** である、としている点、3)体のペアを組む動詞はお互いに別語であり、動詞派生一般の個別の場合にすぎない、としている点、したがって、体のペアとしてあげられているものは、形態面に重点を置くよりは、むしろ、意味面に重点のおかれたペアの表示である為、そこには **имперфективация** も **перфективация** も **супплетивизм** すべて、体のペアとして同等に扱われていること、等については、注目しておかねばならない。

具体的・個別的現象面での体の用法を決定して行くファクターは、ラースドヴァも指摘しているように、言語的（語義的、文法的）要因や発話的要因（伝達課題）、そして **Aktionsart** との関係<sup>⑮</sup>、更には、磯谷氏の指摘になる **актуальное членение** との関係<sup>⑯</sup>、等がある訳で、これらを鳥瞰する手段はないのであるから、まだまだ体の問題には未解決の問題が山積しており、数多くの研究課題が我々の前に提示されている、と言えるのである。

〔註〕

- 1) 大塚高信編, 新英文法辞典 (改訂増補版), 三省堂, 1970, P. 484
- 2) Ivan Poldauf, Место грамматики и лексикологии в изучении вопросов глагольного вида. («Вопросы глагольного вида» Ю. С. Маслов編. Из-во иност. лит. 1962. Москва. стр.77)
- 3) エドワード・サビア (泉井久之助訳), 言語, 紀国屋書店, 1964, P. 30.
- 4) Vaclav Machek, Sur l'origin des aspects verbaux en slave. («Славянская филология. сборник статей III.» Москва, 1958. стр. 58.), – Автор считает вид лексической категорией (в отличие от большинства ученых, считавших вид категорией грамматической.)
- 5) Н. С. Авилова, Вид глагола и семантика глагольного вида. стр.9, – Видовая оппозиция есть грамматическая оппозиция, основа грамматической категории вида. В том-то и заключается специфика вида, что не все глаголы его охвачены.  
 しかし、この点では、次のボンダルコは、ニュアンスを異にしている。  
 А. В. Бондарко, Русский глагол. Из-во Просвещение, Москва, 1967, стр.42  
 – Противопоставление сов. и несов. вида далеко не исчерпывается видовыми парами. Оно распространяется на всю лексику. Все образования сов. вида противопоставлены всем образованиям несов. вида.  
 ラスードヴァも同じ見方である(「ロシア語動詞の体の用法」磯谷孝訳編, 吾妻書房, P. 38)。
- 6) Вопросы глагольного вида. Из-во иност. лит. 1962, стр. 7–32
- 7) マースロフは、6)の論文の中で、更に、この二つの概念の中間的位置を占めるものとして предельность – неопределенность (терминативность – атерминативность)あるいは、лимитативность – алимитативность)を挙げている。
- 8) В. В. Виноградов, Русский язык. Грамматическое учение о слове. Из-во Высш. школа. 1972. стр. 379.  
 -Эта теория при своем зарождении сплелась в сложный кубок вопросов. Сюда относились и учение о формах времени, и учение о правилах образования глагольных форм и слов, и вопрос о семантических границах глагола.
- 9) В. В. Виноградов, там же, стр. 379–390  
 例えば, Павский, Потебня, Буслаев について。
- 10) Н. С. Авилова, там же, стр. 29.
- 11) Н. С. Авилова, там же, стр. 30.
- 12) В. В. Виноградов, там же, стр. 395.
- 13) Ю. С. Маслов, Морфология глагольного вида в современном болгарском литературном языке, Из-во АН СССР, Москва- Ленинград, 1963, стр. 4–5.
- 14) 「ロシア語動詞の体の用法」磯谷孝訳編, 吾妻書房, 1968,
- 15) Н. С. Авилова, там же, стр. 36–41.
- 16) Н. С. Авилова, там же. стр. 28–41, стр. 130–167.
- 17) О. П. Рассудова, Употребление видов глагола в русском языке.  
 Из-во Мос. ун-та, 1968, стр. 12 及び磯谷訳, 同著 P. 38
- 18) Н. С. Авилова, там же, стр. 9.  
 5)の引用文に同じ。
- 19) Н. С. Авилова, там же, стр. 9  
 -“грамматичность” опирается на основной признак грамматической категории – на наличие глаголов, находящихся в грам. противопоставлении частных, грамматических значений в видовой паре глаголов..... Мы не считаем возможным согласиться с..... пониманием..... в соответствии с которым считается, что все глаголы русского языка охвачены этой оппозицией в общем, системном плане.
- 20) И. П. Мучник, Грамматические категории глагола и имени в сов. рус. языке. Из-во Наука,

- Москва, 1971, стр. 112–113.
- 21) Ю. С. Маслов, там же, стр. 5.
  - 22) Ю. С. Маслов, там же, стр. 5.
  - 23) В. В. Виноградов, там же, стр. 391–394.  
Д. Э. Розенталь, М. А. Теленкова, Словарь-справочник лингвистических терминов. Москва. Из-во Просвещение, стр. 54–55.  
J. Forsyth. A Grammar of aspect. Usage and meaning in the Russian verb. Cambridge at the University press. 1970, p. 2–3.
  - 24) И. П. Мучник, там же, стр. 99.
  - 25) В. В. Виноградов, там же, стр. 391.  
- Понятие оконченности приходится диалектически переносить и на начало действия, когда речь идет о глаголах совершенного вида с начальным значением, вроде *заговорить, зашелкать, засвистеть, победить* и т. п.
  - 26) А. М. Пешковский, Русский синтаксис в научном освещении. Издание седьмое, Учпедгиз, 1956, Москва, стр. 109–110.
  - 27) В. В. Виноградов, там же, стр. 393.  
- Не ограниченное никакими рамками времени начинание, попытка начинать или прекращать что-нибудь не мирится не только с понятием непротяженности, но и с понятием предельности, временной ограниченности действия, которое в этом случае может и не походить на точку, т. е. может иметь измерение.
  - 28) И. П. Мучник, там же, стр. 102.
  - 29) В. В. Виноградов, там же, стр. 393.
  - 30) В. В. Виноградов, там же, стр. 394.
  - 31) В. В. Виноградов, там же, стр. 394.
  - 32) И. П. Мучник, там же, стр. 103.
  - 33) И. П. Мучник, там же, стр. 97.
  - 34) Современный русский язык. под ред. Виноградова, Из-во Мос. ун-та, 1952, стр. 309.  
- Категория вида . . . характеризует выраженное глаголом действие или состояние с точки зрения отношения к его внутреннему пределу или независимо от всяких ограничений в его течении или повторяемости.  
(Кузнецовの執筆.但し、ここでは、читать—прочитатьは、体のペアとして解説)。
  - 34) Грамматика русского языка. Том I, Из-во АН СССР, Москва, 1960, стр. 424.  
- а) . . . всего течения, в процессе совершения, а тем самым в длительности или повторяемости, напр.; *жить, петь, . . .*  
б) как ограниченное, сосредоточенное в каком-либо пределе совершения, будет ли то момент возникновения, начала действия или же момент его завершения, его результат, напр.; *запеть, кончить, победить, пропеть, прийти. . .* (Е. С. Истрина 執筆)
  - 34) В. М. Никитевич, Грамматические категории в современном русском языке, Учпедгиз, 1963, стр. 116–117.  
- В своем наиболее общем содержании вид определяется как выражение внутреннего предела действия. В конкретном содержании глагол указывает на законченность, результативность, ограниченность во времени действия/дочитал, прочитал, почитал/ и соответственно – на его незаконченность, нерезультативность и длительность или повторяемость во времени/дочитывал, прочитывал, почитывал/ или вообще никак не определяется с точки зрения/читал/.
  - 34) Современный русский язык. часть II, под ред. Галкиной-Федорук, Из-во Мос. Ун-та. 1964, стр. 143.  
-Основой общего понятия о виде является значение предела действия, обозначенного глаголом. Основным признаком глаголов сов. вида является выражение внутреннего предела действия.

... вне отношения к его внутреннему пределу является общим значением глаголов несов. вида. Вид глагола является грам. категорией, организованной как бинарное/парное/противопоставление...

(Горщикова К. В. 執筆)

- 35) Грамматика современного русского литературного языка, Из-во Наука, Москва, 1970, стр. 337.  
- Глагольное слово может называть действие или как такое, которое достигает своего предела, или безотносительно к достижению предела. Глаголы сов. вида—это глаголы, называющие действие как достигшее своего предела, Глаголы несов. вида—это глаголы, не содержащие указание на достижение предела действия. . . .

Наиболее абстрактным значением предела действия является значение внутреннего качественного предела, т. е. такой границы или “критической точки”, по достижении которой должно исчерпать себя и прекратиться. (Н. С. Авилова 執筆)

- 34) А. Н. Гвоздев, Современный русский литературный язык. I, Из-во Просвещение, Москва, 1967, стр. 306.  
- Грамматические значения видов связаны с выражением отношения действия к его пределу, завершённости.
- 36) Л. Н. Смирнов, Глагольное видообразование в современном словацком литературном языке, Из-во Наука, Москва, 1970, стр. 17.
- 37) А. П. Рассудова, там же.
- 38) J. Forsyth, там же. стр. 6–8.
- 39) А. В. Бондарко, там же, стр. 10–21.
- 40) А. В. Бондарко, там же, стр. 16.
- 41) А. В. Бондарко, там же стр. 17–19.
- 42) Н. С. Авилова, там же, стр. 23–24.
- 43) В. В. Виноградов, там же, стр. 392.
- 44) Н. С. Авилова, там же, стр. 13–20.

このような語義の分類は、当然の事乍ら、非常に似た形でもって日本語動詞についてもすでに試みられている(「日本語動詞のアспект」金田一春彦編, むぎ書房, 1976年, P. 294–306)のは、ロシア語動詞と比較した場合、興味あるものである。

- 45) О. П. Рассудова, там же, стр. 8–16. (磯谷訳, P. 34–42)
- 46) 磯谷孝編著, 演習ロシア語動詞の体, 吾妻書房, P. 179–181